

夢中になれば かべは破れる

パラリンピック金メダリスト
大目方邦子さん



パラリンピックに四回出場、八個のメダルを持つ大目方さん。
次のパラリンピックに向けて今日もトレーニングにはげんでいます。

文／佐々木とく子
写真／後藤さくら

三歳のときの交通事故

二〇〇六年三月、トリノ・パラリンピックのアルペンスキー大回
転。ゴールを通過し、大目方さんは電光掲示板を見ました。数字は、マイナス〇・〇八。ライバルを百分の八秒差でやぶり、金メダルを
獲得したしゅん間でした。
大目方さんは、いすにこしかけた姿勢ですべる「チェアスキー」の選手です。トリノ大会をふくめ

て、四回のパラリンピックに出場し、二つの金メダルのほか銀・銅メダルをとった、世界トップクラスの選手なのです。

「スキーを始めたときは、選手になるとはまったく考えていませんでした。夢中でやっているうちに、

今日まで来てしまったんです」
大目方さんは、三歳のとき交通事故で右足を失い、左足には現在も障害があります。そのときの医師からは「命さえ危ない。歩けるようにはならないだろう」と言われたほどでした。しかし、何度もの手術とリハビリをがんばりぬき、義足をつければ、つえがなくても歩けるまでになりました。
幼稚園では、みんなといっしょに楽しい生活を送った大目方さん。

それが変わったのは、小学校入学のときです。地元の小学校に通うには審査員の前で歩いてみせて、「ほかの子にめいわくをかけずに学校生活を送れる」ことを証明しなければならなかったのです。
審査員は、「つえを使わずに歩けるから、入学してもいいでしょう」と言いました。
「そのとき、つえや車いすだと、小学校に通えなくなるんだ」と強く思いこんでしまったのです」

障害者＝弱者なの？

小学校では、障害をからかわれることもありました。けれど、そんなときには大目方さん自身も「どうしてそんなこと言うの！」と、



スキー板は1本なので、うまくバランスをとってすべる。
(撮影／堀切功)



2006年、トリノ・パラリンピックで金メダルをとったときの笑顔。(共同通信社)

※ 身体に障害のある人の国際スポーツ大会。もう一つのオリンピックと呼ばれる。

元気に言い返していましたし、いっしょに抗議してくれる友だちもいました。

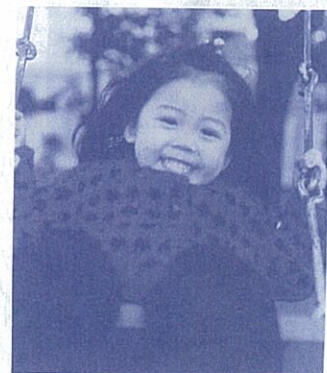
「ケンカをしても、いつの間にか仲直り。いじめという感じではありませんでした。ところが中学に入ったら、いじめの標的にされてしまったのです」

バケツの水をかけられたり、足をひっかけられたり、無視されたり……。いじめを見ても、クラスメートは笑っているだけです。

「障害者だからおとなしくしていればいいのに、むかつくんだよと、よく言われました。障害者は弱者だという思いこみがあるので、弱いはずの人が自分より速く泳げたり、成績がよかったです」

です。ひと目見てすぐに「いいものがあつた！」と大日方さんは感じました。

「やってみるとスキーには解放感やスピード感があります。なんて楽しいんだろう、と思いました」
チエアスキーを始めたことで、気づいたこともありました。



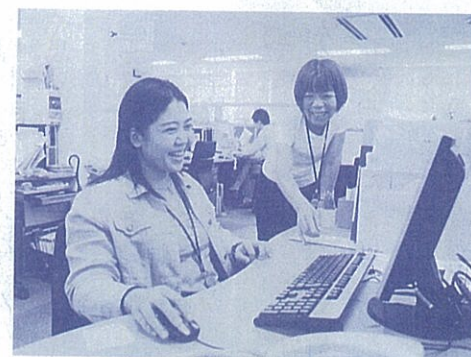
3歳のころ。まだ、事故にあう前で、ブランコに乗ってごきげん。

ことが腹だたしかつたのでしよう。障害者イコール弱者だから守つてあげなければいけないというのは、一見正しいようでいて、じつは危険な考え方なんです」

重力の制約のない水の中は、陸上よりもずっと自由に動けるので、大日方さんは水泳が得意です。そして、あたりまえのことですが、足が不自由なことで学力には、なんの関係もないのです。

チエアスキーを車いすにもたせてかけておけば、一人できつと乗り移れます。ところが、義足は雪の上ではすべて危険なので、だれかの手を借りないと乗れません。車いすのほうが便利なのです。

それまで大日方さんは、どんなに足が痛くてもつかれていても、



会社の仲間と話す。競技中とはちがひ、仕事中はいつも笑顔だ。

スキーつて楽しい！

学校生活は高校で一変しました。「いじめにあうのではないかと身構えていた大日方さんが、拍子ぬけするほどでした。友だちも先生も、障害をわたしの個性として受け入れてくれたのです」

もう一つ、大きな出来事がありました。チエアスキーとの出会い

つえや車いすを使いませんでした。いつの間にか、自分の心の中にかべを作ってしまったのです。そのときから、車いすに乗ることには抵抗を感じなくなりました。

「わたしは、チエアスキーに夢中になったことで、自分の中にあつたかべに気づいて、そのかべを破ることができました。だから、みなさんも、夢中になれることを見つけてほしい。そして自分のよさ、友だちのよさを認められる人になつてほしいと思います」

大日方さんは今、次のパラリンピックをめざしています。十月から三月までは国内外で競技と練習をくり返し、百分の一秒単位の記録のかべを破っていくのです。



週5日はトレーニングをする毎日。パラリンピックは年々レベルが上がっている、メダリストとはいえ練習が欠かせない。